



お試し版

小悪魔

Suzumo★

FOR
ADULT
ONLY

〜鳳凰院凶真の憂鬱〜

西暦二〇一〇年一〇月某日。

残暑を過ぎたばかりの秋葉原メイクインニヤンニヤン。

「ああ……目に映る何もかもが虚しい。この鳳凰院凶真が、ただ徒に人生を浪費するだけの存在に落ちぶれるとはな……。かつては狂気の名を欲しいままにしていたマッドサイエンティストも、失われた過去を振り返るだけのつまらない存在に成り果てたものだ」

岡部倫太郎は厨二病全開で悲嘆に暮れていた。

向かいの席に座るのは岡部の頼れる右腕〈マイ・フェイヴァリット・ライトアーム〉こと橋田至。通称ダル。

岡部倫太郎の厨二病も毎度の事だが、突っ込まずにはいられなかった。

「ちよちよ、オカリン？公共の場で突然厨二病とか一般人引くだろ、JK」

「違うわ！貴様のようなフェイリスオタクのスーパーハッカーに厨二病呼ばわりされる謂れはない」

「自分からついてきて文句言うとかひどくね？あとハッカーじゃないだろ、ハッカーな」

「べ、別に一緒に来てほしいわけじゃないんだからね！」とかネタフリされたからOKしただけだろ。まったく……、ウチのラボにツンデレは助手だけで間に合ってるというのに」

助手ことクリスティーナの為、俺はラボメン達の思いを切り捨てた。

代償で取り戻した束の間の日常。

その為に入院までするハメになったのは数ヶ月前の出来事だ。

文字通り人生観が変わる程に流転した時間。

俺の主観時間ではほんの一ヶ月にも満たない期間だろうか。

世界線変動率 1.048596% 《steins;gate》

そこに到達して手に入れたのは、俺を含むラボメン達と絶望に満ちた世界線との隔絶。

結果としてソレは成し遂げられて、めでたしめでたしで終わる筈だったが、心残りが無いわけでもない。

鈴羽、である。

本来出会う筈のない彼女に出会ってしまった事。

彼女の父親を探す為に奔走し、彼女の思いに触れた事。

そして、まゆりを助ける為、自らの判断で全てを無に帰した事。

結果を見れば正しい筈。

にも関わらず、俺は鈴羽が居ないこの時代に違和感を覚えている。

そんな自分を不思議に思う。

これでよかったと、自分に言い聞かせる度後悔の念は膨らんでゆく。

鈴羽の存在が俺にとってそんなにも大きかったのか。

鈴羽と過ごしたあの思い出は全くの無意味だったのか。

例えそれが気休めでも、彼女の為に出来ることはなかったのか。

何度も自問したが、答えは出なかった。

脳裏によぎった気の迷いを、頭をブルブル振って有耶無耶にする。

しかし、そんな悩みなどお構いなし、横槍を入れてくる人物がこのメイクインニヤンニヤンには居るのだ。

「凶真、何かよからぬ企み事でもしてるニヤン？……まさかアキバの

征服をたくらむ黒メイド団の誘惑に乗る気かニヤー!? だめだニヤー! 凶真がフェイリスとアキバの平和を一生守るって約束、嘘だったのかニヤン!？」

やはり、というべきだろうか。

このメイクインニャンニャンのアイドルでもありオーナーのフェイリス。軽くジャブ替わりに厨二病設定をぶちかますのもいつも通りである。

俺は別段メイドが好きではない。

だが、それでもこのメイドカフェにだけは頻繁に足を運ぶのはやぶさかでない。

その理由の一つは、多分彼女に逢えるからだだろう。

夏の終わりにラボメンの一員になったフェイリス。

俺は彼女の揺らがない明るさが嫌いじゃない。

でも今日は気が乗らないのである。

彼女のネタフリにも応えられず、ただ只管に心を支配しているのは虚しさばかり。

まるで自分が別人になってしまったように思えた。

「黒メイド団だと？ ふん、この鳳凰院凶真を籠絡しようなど、片腹痛い！

だがフェイリスよ、この鳳凰院凶真、一時的に貴様に力を貸しているに過ぎん。この俺ですら、その力の矛先を制御する事は不可能なのだ！ フウーハハハハ！！」

無理をして厨二病全開で応える岡部だったが、フェイリスには岡部の気持ち等お見通しである。

チェシャ猫の微笑《チェシャ・ブレイク》

フェイリスには一種の読心術の能力がある事を忘れていた。

「凶真が普通にノってくるなんて……これは重症だニヤ。そんな凶真にはフェイリス特製オムライスが今日のお勧めですニャン。アキバの天使フェイリスニャンニャンが作ったオムライスを食べたら、凶真の険しい顔もきつとニコニコ笑顔になるニヤ！はあい、あーん♥」

（おい！自分で振ったネタはちゃんと回収しろ、恥ずかしいではないか！というか、ここはフェイリスのファンだらけの店内だぞ？）

案の定、フェイリスオタクのダルが、顔を真っ赤にして本気で悔しそうに嘔み付いてきた。

「ちよ、こんだけ通ってる僕ですらされたことないぞ、そんなサービス！嫉妬で人が殺せたらって今日程思った日はないんじゃね!? オカリンまじ爆発しろ!!! ムキー!!!」

フェイリスファンが詰めかける店内でオムライスをあーんされている状況、

ダルその他の客から送られる嫉妬の眼差しは凄まじかった。

いつもの岡部なら、ダルをからかいつつフェイリスの好意に甘えたのかもしれない。

「……すまん、フェイリス。お前のオムライスを食して空腹感は満たされても、俺の心に空いている巨大な穴は埋められないのだ……」

そう格好をつけて席を外すつもりで立ち上がったトコロで、キュルルとお腹が鳴ってしまい台無しだった。

世の中儘ならない時は、とことん儘ならない。

今日はそういう日なのだろうか。

「ブツブツ オカリン超カコワルイｗｗ」

先程の嫉妬を引きずっているのかダルの突つ込みは棘があった。

（ぬううう、ダルめ！ というか俺のお腹！ 少しは我慢できんのか!!!）結果としてダルも足止めに加担する形になったが、この場に居る俺を足止めする人間は、何もフェイリスやダルだけではなかった。

「オツカリン、トウツトウル☆さつきお店に来たばかりなのにもう帰っ

ちやうの？ 今日ね、まゆ☆しいに挨拶もなくてまゆ☆しいは少し怒っているのです。ぶんぶん」

フェイリスの横からピョコツと現れたのはまゆりだ。

どう見ても怒っているように見えないいつもの笑顔で、人懐こい子犬のよ



うに俺たちのテーブルへ歩み寄って来た。

本来まゆりは、人を怒ったり責めたりするような事には向いてない。

だが、彼女がここ一番で俺を叱咤する程の強い意志を持っている事も件の出来事で思い知らされた。

幼馴染の自分ですらそうなのだから、付き合いの短い人間からは想像もつかないだろう。

その上入院していた数ヶ月前、満足に動けない俺を甲斐甲斐しくも看護していたまゆり。

退院した当初はまゆりに頭が上がらなかった。

当のまゆりは、今もそんな事をおくびにも出さないが。

そんなまゆりだからこそ、ハの字眉毛の心配そうな顔で気を遣うのだ。

「最近のオカリンは、なんだか元気がなくて心配なのです。何か悩み事があったら、まゆ☆しいにはちゃんと教えて欲しいなあ」

「ええい、何なのだ一体！孤高のマッドサイエンティストにも、一人で悩みたい時があるのだ！よしんば悩み事があった所で、この鳳凰院凶真、明日には完全に復活してるに決まっておるのだ！フウーハハハ！……ハア」

「ほらー、いつもと違ってそのほーおーいんさんも元気がないよ。悩みがある時は、誰かに聞いてもらおうだけでもマシって、クリスちゃんが言ったよ？まゆ☆しいとクリスちゃんは、お互いに悩み事を相談しあう仲なので。

えっへん」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら岡部はくさす。

「クソッ、クリスティーナめ。まゆりを手懐けおつてからに……。まゆりは我が人質にして人体実験の生贄、そう決まっているのに。……ちなみにクリスにはどんな悩み事を相談したの？」

「んーとね？最近、バナナの値段が高くてお財布がピンチだとか、どうしたらルカくんがコスプレ衣装着てくれるのかとか、色々だよー」



心底悩みのなさそうな顔で嬉しそうに答えるまゆりだった。

「悩みのレベルが低すぎるわ！！」



「えー？ そんなことないよ。まゆ☆しいにとって、バナナと唐揚げはソウルフードなのです。それに、悩みを相談したらクリスちゃんがバナナ味の

飴くれたよ」



何故かクリスがハアハア息を荒げながらまゆりにアメをあげる姿が脳裏に

浮かんだ。



「まゆ氏、まゆ氏。オカリンにはぐらかされてるお」

ダル指摘で憤慨し、オカリンに迫るまゆりだった。



やはり全く怒っているように見えない。



「あーっ！ ひどいよー、オカリン……。みんなこんなに心配してるのに

打ち明けてくれないなんて、まゆ☆しいは哀しいのです」



「クッ、誰も気付かなければこのまま爽やかに退場できたモノを……！！」



フェイリスもまゆりも、心配してくれているのは身に沁みて理解出来る。



いや、ダルもだったか。



だがこの悩みを打ち明けるには、俺が経験したあのSERENとの戦い、そ



してタイムマシンについても触れねばならない。



仮に打ち明けたところで、まず間違いなく、いつもの厨二病設定乙と思わ



れて流されるだろう……。



それどころか、下手をしたらそれが切欠になって世界線変動率の変更され



てしまう、その可能性すらあるのだ……！！



岡部は思いを胸にしまい込み、絞りだすように告げる。



「すまん、フェイリス、まゆり、ダル。こればかりは、誰にも相談する事が



出来ない……お前たちに知られてしまう事で、世界が絶望に支配されてしま



うかもしれないのだ……！！



……！！

時間はかかるかもしれない……だが、きっと自分で答えを見つけてみせる。
だから今は、……今だけは放って於いてくれ……」

やはり厨二病にしか聞こえなかった。

「凶真……」

「オカリン……」

フェイリスとまゆりは、岡部が本当に悩んでいる事を感じ取ったのだろう。

千円札を一枚テーブルに置いて店を後にする岡部。

フェイリスとまゆりは何故か柱の陰から目をウルウルさせながら、岡部の

立ち去るその後姿をただ見送る事しか出来なかった。

「なんだか真剣な空気に吞まれたが言わねばなるまい。厨二病乙」

ダルは空気の読めない男だった。

だが何かを思い出したようにカッと目を見開きながら、

「ん？ ボクは今正に、とんでもない事実に気づいてしまった!!」

「ニヤニヤ！ダルニヤン、まさか凶真の悩み事の内容が解ったニヤン!?」

「えー、ダルくんすごいよー!」

フェイリスとまゆりの期待は最もだ。

しかしその期待を裏切る男がダルである。

「よっしゃー！ オカリンがフェイリスたんにあーんされる権利を放棄した

事で僕に権利が移動！場に伏せてあるタナボタのカードをタップしてずっと

僕のターン！ これで僕もリア充の仲間入りk t k r!!」

なぜか目を閉じて、口を開けながらフェイリスからの施しを待つダル。

それを無視してオムライスを下げるフェイリス。

追い打ちとばかりに、

「……ぬか喜びにも程があるニヤよ！ ダルニヤンはフェイリスのネタに
ちゃんと付き合ってくれないからニヤ。フェイリスのあーんは、そんな
に安くないニヤ。凶真を見習って、フェイリスに付けてくるニヤン」



「聞きたくない、フェイリスたんからそんな現実には聞きたくないよ！



……オカリンとフェイリスたんの厨二病は、そんなところのニワカがつ



いていけるレベルじゃないぞなもし。まっ、フェイリスたんがつかなくて



も、我々の業界ではご褒美ですから。まゆ氏ー、まゆ氏ー、ボクにオムラ



イスあーん権は百八式まであるぞ？ 今なら無条件で進呈致しますよう」



「だが断る。なのです」



即答だった。



いつものように繰り返されるそんな喧騒。



共に過ごしていた岡部が居ない為、物足りなさを感じるフェイリス、



まゆり、ダルの3人。



岡部倫太郎が例え厨二病で痛かろうと、やはりラボの象徴なのである。



「あゝ、オカリン本当に帰っちゃったよ……」



「凶真があのままじゃ未来ガジェット研究所の危機ですニヤ。ここは後で一



緒にラボに寄って凶真を励ましてあげないといけないニヤン！ それがラボ



メンガールズの義務だニヤー」



「えゝ、オカリン怒らないかなゝ」



「フェイリスたんが来るならこのボクも行かざるを得まい。変態紳士の名に



かけて」



岡部の知らないところでフラグが立ちまくってたのを、勿論岡部本人は知



る由もない。



岡部の知らないところでフラグが立ちまくってたのを、勿論岡部本人は知



る由もない。



岡部の知らないところでフラグが立ちまくってたのを、勿論岡部本人は知



る由もない。



岡部の知らないところでフラグが立ちまくってたのを、勿論岡部本人は知



る由もない。



岡部の知らないところでフラグが立ちまくってたのを、勿論岡部本人は知

続く

お試し版には、18禁要素が入っていませんが、販売しているものには入っていますので購入をお考えの方はご注意ください。

「小悪魔suzuha」委託取扱い店舗様

とらのあな

<http://www.toranoana.jp/mailorder/article/04/0030/05/84/040030058452.html>

メロンブックス

<http://shop.melonbooks.co.jp/shop/detail/212001052741>

■販売予定イベント

コミックマーケット82 8/12(日曜)東ツ-58b サークル名 睦月堂

■サークルHP

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~mosarin/caution.html>

発行 睦月堂
文 プリア
絵 池田靖宏
編集他 もっさり優



* 著者、サークルの許可なく本誌の一部、または全部の無断転載、複製、WEB上でのアップロードなどの行為を一切禁止します。